



おもしろ にいがた学



新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、
方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学講師、日本語教師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員

著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）
「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」（人間の科学新社・共著）
「明治大学政経論叢 2016年度（新潟美人）」（明治大学政治経済研究所）等

「イとエの話」

さあ、新年の始まりです！今年も元気に楽しい（多分）、役に立つ（十分）話題をお届け致しますので、よろしく願い致します。

新潟県民が苦手とするもののひとつに、母音の「イ」と「エ」の発音、あるいはその区別が挙げられます。「絵か胃か」、「越後かイチゴか」、「江戸か井戸か」、「園長か院長か」、「学園か学院か」、「公益か広域か」、「エゴ（食物）か囲碁か」に始まって、「色鉛筆」「一致団結」「遠近法」等々、実際筆者の周囲でも混同・逆転した発音を耳にします。おまけに、下越地方ではアクセントの逆転化も起こるので「干支か糸（かの地は糸のイを低く発音）か」、「椅子（同様椅子のイを高く発音）かアルファベットのS（エス）か」、とややこしいことこの上ないのです。

しかも「イとエ」を逆転して話す人、「イとエの中間音」を駆使する人、エ音だけイ音で発音する人、公的な場ではそうでもないが、私的な場面やアルコールの入る場合は見事に逆転化する人と実にさまざま、それだけ県民泣かせの発音が「イ」と「エ」です。

この現象は県内ではおおむね中越、下越を中心にみられ、佐渡や上越ではあまりみられないようです。とは言え、上越の地域によっては混同がみられるのも事実です。

「佐渡は京の文化が根付いているし、上越はかみえちごで、やはり当時は都に近かったからなあ…」と下越・中越の人、早合点してはいけません。

もともと母音のイとエは明瞭に発音しなければ

いけない上、口の両端を緊張させなければならない音で、寒い地域の人にとっては苦手な発音でもあります。おまけに、しょうがりな人の多い我が県は人前であっぱん口開けて話すのはみばわ～りため、奥ゆかしくほそほそ話すのでそうなりましたとさ、とは大田説ですので、言語学・民俗学に詳しい方は「こらえてつかあさい」ね。

とは言え、全国的にみていくと、このイとエの混同地域は、冬場寒さ厳しい北関東や東北に点在しています。また、江戸っ子が「シ」と「ヒ」の発音が逆転・曖昧化する例もあり、関西では「七味唐辛子」が「ひちみとうがらし」と発音されたり、数字の七も「ヒチ」であったりすることがあるように、発音の曖昧化はなにも本県に限ったことではないようです。

と思っていた矢先、先般、明治大学で開催された日本ことわざ文化学会の発表の中で「カイルのこはカイル」という可愛い蛙の描かれた幕末の「教訓いろはたとゑ」（古いカルタ様）を発見。重箱の隅質問したのですが詳細不明のため、勝手に「イとエの発音は、江戸でも当時の人々は苦手であった。もしかして表記も曖昧であった」ということにおきました。しかし、このイとエの発音の混同・逆転・曖昧現象についてはますます興味がわいてきた次第ですので今後も調査して参ります！

